

「気づいて分かること、変わること」

ルカによる福音書19章1節

女子聖学院中学校高等学校 英語科教諭 滝澤 佳代子

私には 4 歳になったばかりの息子がいます。息子を見ていると、4 歳児の毎日というのは「気づき・発見」の連続であることが分かります。つい先日も、「ママの小さい時のママは誰だったの？」というので、「ばばよ」と言うと、びっくりした顔をして「そうだったんだ!」と感激しながら納得していました。保育園からの帰りに、「ママ、犬って書いてあるよ!」と得意気に言うので、指さす方を見てみると、TSUTAYA の看板に大きく「本」と書かれていたり、大きいという漢字を見て、「ママこの字は「うんち」っていう意味?」と聞いてきたり、(おそらくトイレの水を流すボタンの字を見てそう思ったのだと思います)様々な勘違いも含め、身の回りのことの一つ一つの発見に目を輝かせる様子を見ているのはとても幸せな気持ちになります。

そんな息子から、わたしも気付かされたことがあります。毎朝、私は学校へ、息子は夫と一緒に保育園へ行くのですが、私の方が早く家を出る時に、息子が「ママ、行ってらっしゃい。気を付けてね。」と言うのです。私が息子に言うのを真似て言っているのだと思いますが、その息子の言葉に、その昔、学校に行く私に母が毎朝「行ってらっしゃい。気を付けてね。」と言っていたのを思い出しました。

高校生ともなると、「学校へ行くだけなのに、気を付けようもないけど」と思いながら、何となく聞いていたその言葉が、いざ自分が母親になり、子どもを見送る立場になると、それは祈りなのだと気づきました。学校に行く道中だけでなく、学校生活においても、友達のなかでも、自分の目の届かないあらゆる場面で守られるように、また危険なことから身を遠ざける知恵をもって過ごせるように、と安全を祈る気持ちが「気を付けて」には、込められていたのです。

息子から言われる「気を付けてね」に、息子のやさしさを嬉しく思いながら、同時に、あの頃母をもっと気づかってあげればよかったな、という思いが胸を刺しました。

さらに、思い出したもう一つのことがあります。

私は一昨年、母方の祖母を亡くし、とても寂しい思いをしました。両親が働いていたので、私は子どものころから、同居していた祖母と過ごすことが多かったのですが、頭が良くて器用な祖母が大好きでした。私の母親は一人っ子で、祖母からすると母は大事な一人娘です。のんきな母のことを、しっかり者の祖母はいつも心配していました。そんな祖母も 90 歳を過ぎ、体が弱くなってくると、毎日の些細なことの一つ一つを母に頼らざるを得なくなっていました。私の結婚式の時に毛筆で書いてくれた私

の名前は、達筆で有名だった祖母の字とは思えないほど、震えて歪んでいました。それを見た私に、祖母は「すっかりへたくそになってしまったのよ」と恥ずかしそうに、悲しそうに言いました。体や頭がだんだん思うように動かなくなっていく不安の中で、祖母は母を名前ではなく「お母さん」と呼ぶようになりました。少しでも外出すると、2階の出窓のそばで、母の帰りを今か今かと待っていたのだそうです。晩年の数年をそんな風に過ごしながら、最後までしっかりしていたという気力を失わなかった祖母は、毎日、新聞を読み、ニュースを見てはノートにメモを取り続けていました。最後の数か月は寝たきりになっていましたが、ベッドの傍らには必ずノートが置かれていて、私が顔を見せると「ねえ佳代ちゃん、一緒に行ったシューンブルン宮殿、この間 NHK でやっていたわよ。」とか、「茂木健一郎っていう人は面白い人ね」とか教えてくれるのでした。

そんな祖母が95歳で亡くなった時、ベッドわきの棚にはここ数年で書かれたノートが何冊も残されました。今までノートの中身を見たことがなかったのですが、兄と一緒に見てみよう、ということになりました。料理番組のメモや、その日見たテレビ、新聞の記事の感想などの中にいきなり「菅政権の今後」とか「ユースケ・サンタマリア」とか、とにかく気になったことを取り留めもなく書いてあるノートの最後の数ページには「痛い」という字が震えて読めないほどにかすれて何度も書かれていました。そして、亡くなる数日前の、その痛みの中で書かれたであろうその次のページに、「佳津子が幸せに」と書いてありました。

95歳と71歳の親子であっても、母親の思いというのはこんなにも変わらずに続いていくものなのだ、と私は改めて気づかされました。そして、ほとんど話もできなくなってしまっていた、亡くなる寸前の祖母の胸に、こんなにもあふれるような母への愛があったとは、想像もしなかったことでした。

私たちは、毎日を忙しく、あるいは、ぼうっと過ごしながら、色々なことに気付かないでいることが多いですね。子どものように、目をくるくる動かして、アンテナを伸ばし「何か新しいことはないかな？」という気持ちを持ち続けないと、大事なことに気付けないかもしれません。

今朝お読みした聖書の箇所には、ザアカイという取税人が登場します。ザアカイという名前の意味は「正しい」とか「清い」という意味があるのだそうです。きっとザアカイの両親は、「心の正しく、清い人になってもらいたい」という願いを込めて、わが子の名前を付けたのでしょう。ところがザアカイは、他の取税人と同じように必要以上のお金を税金として集め、着服していました。背が低いこと、嫌われる職業についていることなどに、コンプレックスを感じていたであろうザアカイは、おそらく孤独感と劣等感から心を閉ざし、ますます卑屈になって「正しくなろう、清くなろう」という気にもならなくなっていたかもしれません。

そんなザアカイにイエス様が「家に泊まる」とお声をかけられました。ザアカイ喜びのあまり自らの固く閉ざした心を開き、悔い改め、その後の生活態度も一新させて、清く正しいザアカイに生まれ変わりました。

した。自らの罪に気付いたのです。

いくら欠点や弱点が多く、罪深くても、イエス様との出会いによって気づき、変えられる、そんな人間の姿をザアカイは表しています。

さてみなさん、今日はこれから皆さんの期末テストの答案が返却されます。アンテナの準備はできましたか？テスト結果は皆さんの取り組みを反映する大切なメッセージです。まずはアンテナを伸ばすこと。そして大事なことに自ら気づくこと。そして行動に移すこと。気づきは皆さんがよりよく変わる大きなチャンスです。どうか皆さんがこの大切な機会を無駄にすることなく、それぞれの気づきがお一人お一人の成長の糧となることを期待しています。

2012年9月26日 女子聖学院高等学校 チャペル礼拝